

## 5月12日 「いじめ」及び「いのち」について考える日 校長講話

みなさん、おはようございます。

今日は、「いじめ」と「いのち」について、少し考えてほしいと思います。

最初に、ひとつ問いかけます。

「いじめって、どこからがいじめだと思いますか？」  
悪口を言ったらいじめでしょうか。  
無視をしたらいじめでしょうか。  
冗談のつもりでからかったら、それはいじめではないのでしょうか。

はっきりした線引きはありません。

でも、ひとつだけ確かなことがあります。

“された側が苦しいと感じたら、それはいじめになる”ということです。

ここで、実際にあった出来事を話します。  
ある学校に、一人の生徒がいました。  
その生徒は、もともと特別目立つタイプではありませんでした。  
どちらかという、おとなしくて、周りに気をつかうような生徒でした。

最初は、本当にささいなことだったそうです。  
からかいのような言葉、軽いあだ名、ちょっとした無視。  
周りは「たいしたことない」「みんなやっている」と思っていたかもしれません。  
でも、その一つひとつが積み重なっていきました。  
クラスで笑いが起きるたびに、自分のことではないかと不安になる。  
誰かの何気ない一言に、深く傷つく。  
学校に来るのが、だんだんつらくなっていく。  
それでも、その生徒は、なかなか周りに言えませんでした。  
「これくらいで言ったらだめなんじゃないか」  
「迷惑をかけてしまうんじゃないか」  
そんな思いがあったのかもしれない。

そして、ある日、その生徒は命を落としました。

後になって、周りの人たちは気づきます。

「あの時、声をかけていれば」

「あの時、笑わなければ」

「あの時、気づいていれば」

でも、その「あの時」は、もう戻ってきません。

この話は、特別な学校の話ではありません。

どこにでもある、ごく普通の学校で起きたことです。

そして、その中にいた生徒たちも、特別な人たちではありません。

つまり、これは遠い話ではなく、

どの学校でも、どのクラスでも起こりうることなのです。

いじめは、特別な誰かがするものではありません。

気づかないうちに誰かを傷つけてしまうこともある。

周りに合わせて、笑ってしまうこともある。

見て見ぬふりをしてしまうこともある。

いじめには、「する人」「受ける人」そして「見ている人」がいます。

そして、この「見ている人」が、とても大きな力を持っています。

もし、誰かが傷ついている場面で、

一人でも「それはやめよう」と言う人がいたら。

一人でも、その人のそばに立つ人がいたら。

その状況は、大きく変わるかもしれません。

もちろん、「怖い」と思う気持ちもあると思います。

それは自然なことです。

だからこそ、みなさんにお願いしたいのは、

大きなことではありません。

ほんの小さな行動でいいんです。

- ・誰かが一人でいたら「大丈夫？」と声をかける。
- ・人を傷つけるような笑いには乗らない。
- ・しんどいときは、一人で抱え込まず、誰かに話す。

そんな行動が、誰かの心を支えます。

最後に、これだけは覚えておいてください。

人の心や命は、とても大切に、そして、とてももろいものです。  
一度深く傷つくと、元通りにすることは簡単ではありません。

でも、守ることはできます。

みなさん一人ひとりの行動で、守ることができます。

校長として、はっきり伝えます。

この学校で、誰かが苦しんでいるのに放っておかれる、  
そんな空気は絶対につくらせません。

先生たちも本気で向き合います。  
そして、みなさん一人ひとりの力も必要です。

今日の話は、自分には関係ない話として終わらせるのではなく、  
「自分はどうか」を、少しだけ考えてみてください。

以上で話を終わります。